

1. 私は神に向かい声をあげて、叫ぶ。  
私が神に向かって声をあげると、神は聞かれる。
2. 苦難の日に、私は主を尋ね求め、  
夜には、たゆむことなく手を差し伸ばしたが、私のたましいは慰めを拒んだ。
3. 私は神を思い起こして嘆き、思いを潜めて、私の霊は衰え果てる。 セラ
4. あなたは、私のまぶたを閉じさせない。私の心は乱れて、もの言うこともできない。
5. 私は、昔の日々、遠い昔の年々を思い返した。
6. 夜には私の歌を思い起こし、自分の心と語り合い、私のたましいは問いかける。
7. 「主は、いつまでも拒まれるのだろうか。  
もう決して愛してくださらないのだろうか。
8. 主の恵みは、永久に絶たれたのだろうか。  
約束は、代々に至るまで、果たされないのだろうか。
9. 神は、いつくしみを忘れたのだろうか。  
もしや、怒ってあわれみを閉じてしまわれたのだろうか。」 セラ
10. そのとき私は言った。  
「私の弱いのはいと高き方の右の手が変わったことによる。」
11. 私は、主のみわざを思い起こそう。  
まことに、昔からのあなたの奇しいわざを思い起こそう。
12. 私は、あなたのなさったすべてのことに思いを巡らし、あなたのみわざを、静かに考えよう。
13. 神よ。  
あなたの道は聖です。  
神のように大いなる神が、ほかにありましようか。
14. あなたは奇しいわざを行なわれる神、国々の民の中に御力を現わされる方です。
15. あなたは御腕をもって、ご自分の民、ヤコブとヨセフの子らを贖われました。 セラ
16. 神よ。  
水はあなたを見たのです。  
水はあなたを見て、わななきました。  
わたつみもまた、震え上がりました。
17. 雲は水を注ぎ出し、雷雲は雷をとどろかし、あなたの矢もまた、ひらめき飛びました。
18. あなたの雷の声は、いくさ車のように鳴り、いなくまは世界を照らし、地は震え、揺れ動きました。
19. あなたの道は海の中にあり、あなたの小道は大水の中にありました。  
それで、あなたの足跡を見た者はありません。
20. あなたは、ご自分の民を、モーセとアロンの手によって、羊の群れのように導かれました。

## 説教

1. 私は神に向かい声をあげて、叫ぶ。

私が神に向かって声をあげると、神は聞かれる。

「我が声は神に向かって、我が声は神に向かって叫ぶ。

すると我が神は聞かれる。」 (1 節直訳)

詩人は最初にこの詩の要約を告白します。とは言っても、何もかも順風満帆に何の苦勞もなく、祈りの生活を送っていたわけではありません。苦難の日に於ける祈りの葛藤を次のように告白します。

2. 苦難の日に、私は主を尋ね求め、

夜には、たゆむことなく手を差し伸ばしたが、私のたましいは慰めを拒んだ。

「苦難(窮乏、苦悩)の日々に主を私は求め、

夜には私の手を差し伸ばした(流した、注いだ)が、

私の魂は麻痺することなく慰められることを拒んだ。」 (2 節直訳)

苦悩の中、詩人はひたすら神さまに向かって叫び、手を挙げて祈りながらも、安易な慰めを拒み続け、神さまからの明確な応答をひたすら探し続けたのでした。

詩人の葛藤は続きます。

3. 私は神を思い起こして嘆き、思いを潜めて、私の霊は衰え果てる。 セラ

「私は神を思い出して、

うなり(つぶやき、わめき、荒れ狂い)、

沈思黙考し、私の霊は疲れ切った(気が遠くなった、気絶した)。」 (3 節直訳)

「霊 x Wr」は生命力、体力、気力を意味します。詩人は神さまを思い出しながらうなり、つぶやき、わめき、荒れ狂い、しかしそうしながらも沈思黙考して、そういう全身全霊の葛藤によって完全に疲れ切ったと言うのです。

そうして、夜も眠れないまま遂に言葉を失ってしまいます。

4. あなたは、私のまぶたを閉じさせない。私の心は乱れて、もの言うこともできない。

そこで、詩人は自分の遠い昔の日々を思い出します。

5. 私は、昔の日々、遠い昔の年々を思い返した。

6. 夜には私の歌を思い起こし、自分の心と語り合い、私のたましいは問いかける。

「私は、昔からの日々、遠い昔の年々を思い返した(数えた、熟慮した)。

夜には私の歌を思い出し、私の心と共に沈思黙考して、私の霊は探し求めた。」 (5,6 節直訳)

恵まれていたかつての自分の日々を思い返しながら、今の自分の境遇を再考します。しかし、これがまたむしろ一層自分の今の惨めさを思い知る結論となります。

7. 「主は、いつまでも拒まれるのだろうか。

もう決して愛して(受け入れて)くださらないのだろうか。

8. 主の恵みは、永久に絶たれたのだろうか。

約束は、代々に至るまで、果たされないのだろうか。

9. 神は、いつくしみを忘れたのだろうか。

もしや、怒ってあわれみを閉じてしまわれたのだろうか。」 セラ

そうして、次のように結論します。

10. そのとき私は言った。

「私の弱いのはいと高き方の右の手が変わったことによる。」

「私は言った。

『私が傷ついているのはこのためだ、いと高き方の右手が変わったのだ。』」(10節直訳)

つまり、詩人は、何某かの理由で、自分に対する神さまの扱い(御手のわざ)が変わったために、今や自分は神さまに「拒まれ」「受け入れられず」「恵みが断たれ」「憐れみが閉ざされて」しまったと言うのです。そうだとしたならば、それは一体何の理由によるのでしょうか。「神さまがいつくしみを忘れた」からでしょうか。あるいは神さまが「怒ってあわれみを閉じてしまわれた」からでしょうか。

そこで、詩人は今一度思い起こします。今度は単なる自分の過去の栄光を思い出すだけではなく、視点を変えて、「主のみわざ」「昔からのあなたの驚くべきみわざ」を思い起こします。

### 1 1. 私は、主のみわざを思い起こそう。

まことに、昔からのあなたの奇しいわざを思い起こそう。

### 1 2. 私は、あなたのなされたすべてのことに思いを巡らし、あなたのみわざを、静かに考えよう。

「私は、主のみわざを思い起こそう。

まことに、昔からのあなたの驚くべきみわざを思い出そう。

私は、あなたのなされたすべてのことに思いを巡らし、あなたのみわざを沈思黙考する。」(11,12節直訳)

今度は、詩人は、自分の過去に於いて神さまがなしてくださったすべてのみわざ、人知をはるかに超えた奇跡のみわざをじっくりと思い出します。そして、その「思い出す」ことは、自分への神さまのみわざのみならず、かつての昔のイスラエルに対してあらわされた神さまのみわざにまで及びます。

すると、その時、詩人は発見しました。

### 1 3. 神よ。

あなたの道は聖です。

神のように大いなる神が、ほかにありましようか。

「聖」とは、この世から分離した、特別な神の側にある領域のことを意味します。つまり詩人は、神さまが自分とイスラエルに対してなされたすべてのみわざ、奇跡を一つ一つ残らず考えていくうちに、神さまの道が、人の道とは異なる、全く別次元の、人知をはるかに超えた、不思議な、驚くべき道であったことを発見したのです。

もう一度整理します。詩人は、今、苦難の中にあって、神さまに祈りを捧げました。しかし、どうして自分は今こうして苦労しているのか、その答えを見つけることができず、全身全霊挙げて神さまから答えをいただくつもりでも、それがなかなかうまくいかず、やむなく自分の過去を振り返るけれども、過去の自分の栄光を振り返れば、解決どころかよいよ自分が惨めになって落ち込んでしまいます。そこで、ただ自分の過去の栄光をたどるのではなく、つまり、自分が何をなすことができたかというようなことではなく、神さまが自分に何をしてくださったのか、自分がかつて苦しい時にどんなに自分の思いをはるかに超えたみわざをなしてくださったのかを思い出し、そして、さらには、そうした自分の体験から、自分の体験を越えて、イスラエルの歴史の中で神さまがなされたことを思い出すに至って、神さまがどのように生きて働いてこられたのか、神さまがどのように生きてみわざをなされたのかを思い出すに至ったのです。自分の暗い閉じ籠もった部屋の中から、一筋の光を見出し、さらには両戸を開けて、目の前にいっぱい広がる大きな青空を仰ぎ見るようなものです。

### 1 4. あなたは奇しいわざを行なわれる神、国々の民の中に御力を現わされる方です。

### 1 5. あなたは御腕をもって、ご自分の民、ヤコブとヨセフの子らを贖われました。 セラ

モーセの時代のイスラエルのこと、そして、特に出エジプトの紅海渡航の例を挙げて、「あなたの道は海の中に

あり、あなたの小道は大水の中にありました」(19)と告白したのです。

16. 神よ。

水はあなたを見たのです。

水はあなたを見て、わななきました。

わたつみもまた、震え上がりました。

17. 雲は水を注ぎ出し、雷雲は雷をとどろかし、あなたの矢もまた、ひらめき飛びました。

18. あなたの雷の聲は、いくさ車のように鳴り、いなずまは世界を照らし、地は震え、揺れ動きました。

19. あなたの道は海の中にあり、あなたの小道は大水の中にありました。

それで、あなたの足跡を見た者はありません。

世界最強のエジプト軍に追われ、行く手には見渡す限りの葦の海が広がります。このままではエジプト軍に滅ぼされてしまいます。しかし、次の瞬間には、神さまは葦の海を大きく真二つに分けてイスラエルを救われました。これが神さまのやり方です。人知をはるかに超えるやり方で神さまは救われるのです。一体誰が、海が分かれるなどと考えられるのでしょうか。海が分かれるのです。海さえなければ、イスラエルは助かるのです。そのまま逃げていくことができます。その時の状況を見れば、誰が見ても目の前の海は邪魔なものです。それさえなければ、というものです。決定的な邪魔者です。致命的なものです。私の前に立ちただかかって、私の目の前を真っ暗にして、私を絶望の淵に突き落とすものです。絶望の元凶<sup>げんきよう</sup>です。諸悪の根源です。でも、そこに救いの道が開かれました。その絶望の只中に、その先に、海の中に、主の道はありました。自分たちの前にガンと立ちただかり私たちの行く手を阻むおびたしい「大水」の中に、主の道があったのです。それは、神さまが水を震え上がらせて、全能の御手をもって、「右手」をもって、水をぶっ飛ばされたからです。主の「右の手」は変わっていませんでした。主の「右の手」は変わることなく、生きて働いていたのです。モーセの時も、そして、この詩人の時も、です。

私たちも同じではないでしょうか。私たちは、それぞれ人知れず大きな苦難の中にあるかも知れません。祈るけれどもなかなかその答が見つからない。だからと言って、安易な答えはいらない。あくまで本当に納得できる答えが欲しい。そうやって葛藤に葛藤を続けて、疲れ果ててしまっているかも知れません。夜も眠られず、過去を振り返りながら、もう自分はダメじゃないかと絶望しているかも知れません。しかしこの詩人のように、神さまのすべてのみわざを思い出し、(自分の過去の栄光を思い出すのではなく、昔は良かったというのでもなく)、自分になされた神さまの恵み、さらにはイスラエルになされた神さまの恵みを思い出して、そこに思いもよらない神さまの驚くべき恵みを発見して、確信したいと思います。そして、なおも恐れることなく、おののくことなく、雄々しく主の道を歩んでいきたいと心から願います。